

記者発表用のレジュメ

金沢大学 フレスコ壁画研究センター長
人文学類教授 宮下孝晴

於：15:30～16:30 金沢大学フレスコ壁画研究センター

(1) 「南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクト」の調査報告

金沢大学を通じて日本の篤志家が多額の資金を提供し、国立フィレンツェ修復研究所とともに実施されたフィレンツェのサンタ・クローチェ教会大礼拝堂のフレスコ壁画の診断調査と修復事業から得られた成果が認められて、2010年4月から新たなプロジェクトが始動した。それは金沢大学が提出した南イタリア半島領域の壁画群、とくに中世ビザンティン期の壁画に使われた技法や保存状態を科学的に診断調査し、その成果を詳細にデジタル記録するプロジェクトへの概算要求が日本政府（文部科学省概算要求）で承認されたことによる。このプロジェクトは金沢大学教授の宮下孝晴が20年以上も前から関心を抱いていたテーマから生まれたもので、これまで金沢大学と密接な協力関係を結んできた国立フィレンツェ修復研究所と協同で着手するものである。

2010年5月、新プロジェクトの拠点である「フレスコ壁画研究センター」が金沢大学人間社会研究域に設置され、ここに金沢大学の新たな挑戦 - 人文系、芸術系、工学系、医薬系などの多岐にわたる分野の研究者がともに取り組む画期的な挑戦が4年計画でスタートした。この研究プロジェクトは、まだあまり知られていない南イタリアの洞窟壁画の現状を科学的に診断調査し、その成果を医療における電子カルテにならった文化財カルテとしてデジタル・アーカイブ化することを目的としている。

9世紀以降、東方のビザンツ帝国やシチリア島から来たギリシア正教の修道士たちが南イタリア各地の凝灰岩台地に定住するようになった結果、多くの特徴的な洞窟教会や修道院が誕生し、祈りの空間である堂内には旧訳・新約聖書に題材を求めた多様な図像（壁画）が描かれた。こうしてカラブリアやカンパーニア、バジリカータ、プーリア地方には9世紀から13世紀にかけてのイタロ・ビザンティン様式の壁画群が数多く残されることになった。それらは概して現在の市街地や観光コースから遠く離れ、簡単には近寄れない地域に広がっており、1960年代にわずかな調査研究が実施されて以降、本格的、系統的な調査研究が立ち遅れたままになっているため、多くは劣悪な環境下で修復保存の対策が立っていない現状にある。これらの歴史的にも、芸術的にもきわめて貴重な文化遺産は、中東全域、トルコからシリア、グルジア、アルメニア、エジプトまで、あるいは初期キリスト教が伝播した広範な地中海世界に現存する洞窟教会や洞窟修道院の系列の中にこそ位置づけられるべきもので、早急に各地の研究機関が協力して調査・保存に乗り出さねばならない。今回のプロジェクトは、そうした地中海世界全体を視野に入れての歴史的文化的財保護運動に一石を投じるものとなるはずである。ことに中東ビザンティン地域の壁画技法や分類学に関しては、これまで学術的な光が当てられたことがなく、系統的な知見が得られていないという点からも、このプロジェクトには革新的な意義があり、これから展開されるであろう地中海世界における洞窟教会研究の基準点を形成することになるだろう。

壁画の組成や技法を解明し、その現状を記録するために、高度なノウハウを蓄積する国立フィレンツェ修復研究所の専門家による診断調査に加えて、金沢大学チームが導入するデジタル診断機器による詳細な計測データが加わる。壁画の組成に関する情報を知るために、光学機器を用いた各種の非破壊調査、つまり拡散光や斜光線照射のもとでの高精細写真撮影、顕微鏡による描

画面撮影、赤外線や紫外線照射による調査、色差計測定などを実施する。さらに表層の状態や、炭酸塩化の過程や破壊の過程で作られる化学合成物質を知るために、顕微鏡分析を含む化学的調査も行われる。なお、金沢大学チームは2種のレーザー・スキャナ(三次元空間スキャンとミクロン単位での壁画スキャン)を用いて、これ以上ない壁画の現状記録に挑む。

この日伊協同プロジェクトを充実させるために、金沢大学フレスコ壁画研究センターは国立フィレンツェ修復研究所のほか、モリーゼ大学、バーリ大学、ジェノヴァ大学等の研究機関とも連携を図っている。

本プロジェクトのもう一つの目的は、日本の最先端技術を特殊な壁画調査フィールドでも効果的に利用できるように工夫することである。フィールドでの壁画診断調査においてだけでなく、あらゆる文化財研究の場で有益なLED照明機器(将来的には有機ELタイプの照明装置を視野に入れて開発)と小型バッテリーの組み合わせシステムを導入している。最小の消費電力で安定した光源、有害光線の放射を最大限に抑えた照明機器の開発は、フィールド調査のみならず遺跡モニュメントや美術館、博物館の展示照明としても利用可能だからである。

【金沢大学チームの調査概要】

*デジタル記録として

- 高精細デジタル撮影(散乱光): Pentax 645-D
- 高精細デジタル撮影(斜光線): Pentax 645-D
- 3Dスキャナ(建築空間用): Topcon GLS-1500
- 3Dスキャナ(壁画面用): Konica Minolta Range-5
- 赤外線サーモグラフィ: NEC/Avio G-30
- 色差計: Nihonndennshoku NF-333
- 水分計: Kett HI-520
- マイクロスコープ: 3R A-200
- 温度・湿度: Testo-610
- データの集約: Apple ipad

*アナログ記録として

- テンペラ画法による現地模写
- 色差計で計測した全ポイント(100)の水彩絵具によるカラーサンプル

これらの最新の科学計測機器を用いて分析診断された壁画の現状は、デジタル・アーカイブ(データベース)に記録される。

情報:

平成23年9月フレスコ壁画研究センターが実施した南イタリアのプーリア州グラヴィーナ・イン・プーリアの洞窟教会に描かれた壁画群の調査成果発表として、調査から得られた新たな発見も含めて、大塚国際美術館・文化庁と連携して下記のように「国際講演会&写真展」を開催する。

テーマ: 「フレスコ壁画の修復・復元・保存の最前線

～デジタル・アーカイブとセラミック・アーカイブの未来～

平成24年1月29日～3月11日: 鳴門市 大塚国際美術館

平成24年3月17日～3月24日: 金沢市 しいのき迎賓館

於：16:30～19:30 金沢大学人間社会 4 号館1階の造形室及び3階の壁画実習用テラス
(2) 日伊教育研究連携事業：フレスコ壁画の修復実習

「日伊教育研究連携事業」として、本年度は講師にフレスコ壁画修復では世界トップレベルにある国立フィレンツェ修復研究所の専任修復士ファブリーツィオ・バンディーニ氏（57歳）を迎え、人間社会学域人文学類フィールド文化学及び学校教育学類美術教育に所属する学生（25人）にフレスコ壁画修復の講義と実習を3日間の集中講義で行う。

1. 講義：フレスコ壁画の修復技法と哲学 / イタリアにおける壁画修復の歴史
2. デモ：フレスコ壁画の損傷診断 / 洗浄 / 修復
3. 実習：壁画修復における補彩法（カラーセレクション）の実際

さまざまな原因で損傷を受けたフレスコ壁画の修復において、補彩法（カラーセレクション *selezione cromatica*）は最終段階で実施される。これは鑑賞を前提とした壁画に対する美学的な配慮であり、作品の歴史性を損なわないための工夫が必要である。

壁面の欠損部分や描画層の剥落部分に、修復士たちが実際にどのように対処しているかを学び、その代表的な手法である補彩（カラーセレクション *selezione cromatica*）の技術を実習する。

これまでのフレスコが制作の授業で制作した自分の作品の一部を、故意に破損させたり、アクリル樹脂を混ぜた石灰白クリームで被覆し、補償の下地を作ったあと、イタリアの絵画修復技術の中でも特徴的な補彩法（カラーセレクション *selezione cromatica*）で、（破損欠損部分の）周囲の色調や描写と違和感のない補彩を、今回は伝統的なカゼインテンペラを用いて行う。（最近の修復現場では手軽な水彩絵具を用いることが多い。）

*お問い合わせは下記まで

金沢大学フレスコ壁画研究センター 〒920-1192 金沢市角間町人間社会 3 号館

TEL:076-264-5550, 076-264-5472

FAX:076-264-5521

E-mail: fresco@ed.kanazawa-u.ac.jp

San Vito Vecchio (sito originale)



(fondazione)



Padre Eterno



国際交流会



市庁舎訪問

